様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３７２

研究課題名（和文）第一次世界大戦期に於ける国際間書籍の譲与及び鹵獲についての研究

研究課題名（英文）A Study on the international donation and capure of books under World War I

研究代表者
山口　謠司（YAMAGUCHI, Yoji）

大東文化大学・文学部・准教授

研究者番号：００２８６９１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：さまざまな携帯端末が、「本」の形を大きく変えようとしている。紙に印刷された「本」は、いずれ失われる時が来るのであろう。第一次世界大戦が始まったちょうど百年前、「本」は、知識や技術を伝えるためにはなくてはならないものであった。そして、その「本」を巡って焚書が行われ、また「本」によって国の運命が左右されるということが起こったのである。第一次世界大戦は、有線、無線による通信網の発達を促し、それまでの時代と一線を画すグローバル化の契機となった。
我が国は青島の攻撃を行うことでドイツ総領事に置かれた書籍を鹵獲した。そして、同時にドイツが攻撃したルヴァン大学の図書館の再興のために書籍が寄贈された。

研究成果の概要（英文）：Because of the Internet devices, now a day changes the form of "book". Printed on paper "book" will disappear one day. But Hundred years ago that the World War I began, "books" were indispensable media to in order to convey knowledge and skills. And, destroying and struggle was carried out around the "book", and that the fate of the country that depend on the "book" is happened.
The World War I promotes the development of communication network wired, wireless, was the impetus of globalization apart from previous ages. Japanese government attacked the Qingdao and snatched the books placed on the German Consul General. And after Treaty of Versailles, Crown Prince Hirohito offered the Japanese books to the Levin University of Belgium attacked from German army.

研究分野：各国文学・文学論

科研費の分科・細目：書誌学・文献学

キーワード：書誌学　第一次世界大戦　昭和天皇　ベルギー　青島　ドイツ　鹵獲　焚書

１．研究開始当初の背景

第一次世界大戦後大正 8（1919）年に行われた昭和天皇（当時皇太子）によるベルギー・ルヴァン大学図書館再建のために寄贈された日本古典籍目録は、一度山崎誠氏によって纏められ『ルヴァンラヌーブ大学日本書籍目録』（2000）によって全貌を知りうる。ただ、書誌情報の記載に問題があることから、筆者は改めて 2006～2008 年度に、筆者は「ベルギー・ルヴァンラヌーヴ・カトリック大学所蔵古典籍についての研究」（課題番号：１９５２０３１２）によって精査を行い、日本国内にある同種版本等との対校によってより詳細な目録を作成した。

２．研究の目的

第一次世界大戦の勃発まで、それまで以上にヨーロッパはアジアへ進出することによって国家の基盤を強化させようとし、またアジアはヨーロッパから異質の学問体系を吸収することによって列強と比肩する力をつけようとしていた。我が国に於けるヨーロッパの哲学・科学技術の導入が明治以来国家的規模で行われたことはいうまでもない。お雇い外国人や丸善などを経由した書籍の購入がそれである。しかし、第一次世界大戦に伴う国家間の力の再編によって、多くの書籍が譲与され、また鹵獲された。本研究では日本、中国、ドイツ、ベルギーに起こった国家的規模での書籍の与奪を政治史とも絡めて検証し、またそれに関わった人物、またその思想、政治的企図を明らかにする。

３．研究の方法

ベルギー、王立歴史美術館所蔵国書漢籍のデータベース化を行う。これによって明治時代から第一次世界大戦までに我が国からベルギーに譲与された書籍また外交官によって購入搬送された書籍の整理は終了する。また、平成 23,24 年度には、旧ドイツ租借地中国青島並びに済南の総領部にあった書籍・文書の目録「鹵獲書目」「鹵獲文書」のデータベース化を行う。

この 3 年の作業によって具体的に日本からベルギー、ドイツから中国、中国から日本へという書籍の国家的規模での譲与・鹵獲された文献が明らかにできる。

最終年度では、これらを分析すると同時に、特に第一次世界大戦の前後における我が国を中心とした政治動向を踏まえ、漢籍洋書の受容と必要性、また国書輸出の状況を検証する。

さらに、本研究では、第一次世界大戦前後のメディアを含めた大衆文化の変化を見ながら、書籍が果たした役割を追うことを目的とする。

４．研究成果

iPAD や kinndle をはじめ、さまざまな携帯端末が、「本」の形が大きく変わろうとしている。紙に印刷された「本」は、いずれ失われる時が来るのであろう。

しかし、第一次世界大戦が始まったちょうど百年前、「本」は、知識や技術を伝えるためにはなくてはならないものであった。そして、その「本」を巡って焚書が行われ、また「本」によって国の運命が左右されるということが起こったのである。

第一次世界大戦は、有線、無線による通信網の発達を促し、それまでの時代と一線を画すグローバル化の契機となった。

しかし、当時の社会にあって情報集積・交換の主役はなお書籍であった。

東洋への進出により国家基盤の強化を図るヨーロッパ諸国に対し、アジア側も列強と軍備・文化の両面で対抗すべく、書物による情報収集を強化していた。中でも明治維新から急速な西洋化を推し進め、国際社会での地位向上を目指す日本にとって、洋書は極めて貴重な宝であった。

御雇い外国人によって、知識を学びとろうとした明治からすでに五十年程が過ぎようとしていた。まだ御雇い外国人は残っていたが、とくにドイツ人は、第一次世界大戦が勃発する前に日本を離れていく。

さて、１９１４年８月に第一次世界大戦が始まると、まもなく１０月には、我が国は、日英同盟を根拠にドイツへの宣戦布告を行い、東アジアにおけるドイツの拠点・青島（チンタオ）を攻撃した。

当時の青島は、ドイツが中国から九十九年租借したところで、インフラ整備が進められ、街路に電柱まで備える最先端の都市となっていた。

日本軍はそのインフラ部分を壊さないよう配慮し、緻密な攻撃計画を立て、この青島を陥落させる。

青島にあるドイツの技術や本を鹵獲するためである。

我が国は、当時、洋書の購入は、丸善を窓口として行っていた。しかし、洋書は高価でかつ中には輸入規制がされているものなどもあり、譬え注文ができたとしても、到着までには半年や一年かかるということも珍しいことではなかった。しかも、１９０７年１２月、丸善は火事にみまわれて全焼し、店にあった貴重な洋書類の在庫が殆ど灰燼に帰していた。

青島には、ドイツから空輸されるヨーロッパの最新の技術書なども総督府に所蔵されていたのである。

青島を無傷で陥落させた日本軍は、占拠後まもなく総督府にあった書物の目録を作成してこれを国内の大学に送り無償で書籍を送ることを決定した。

洋書が不足していた我が国の大学にとって、これらの書籍はまさに慈雨のようであった。

はたして、１９１４年８月、ヨーロッパでは、ドイツ軍がベルギーに侵攻し、ルヴァンを攻撃した。

ルヴァンはヨーロッパでも屈指の中世大学都市であり、図書館には約２５万冊もの本が所蔵されていた。
　　しかし、この大学を、ドイツは、「ドイツの文化的優位を示す」という理由で火に掛け、焼き尽くしてしまう。
この時焼かれた本の中には、二度と手に入れることができないヴェザリウスの１４世紀写本『人体構造論』、１５世紀の写本集『コデックス・バルケンシス』等、貴重な文献が含まれていた。
図書館を焼く火は、一ヶ月も消えなかったと言われている。
まさに近代に起こった「焚書」事件である。
これに対し、ヨーロッパの知識人、たとえばロマン・ロラン、Ｈ・Ｇ・ウェルズ、バーナード・ショーらが中心になって、ヨーロッパ全土でドイツに対する非難の声が湧き起こる。
そして、大戦終結を告げるヴェルサイユ条約調印後、ルヴァンを支援し、大学都市として再興する運動が始まることになる。
この運動にアジアから唯一参加したのが日本であった。当時、日本は国際連盟の常任理事国になるために文化事業をも行わなければならないという状況にあった。書物を寄贈する事で独自の文化においても西欧に劣らないと誇示する必要があったのである。あるいは、青島占領によってドイツの多くの書籍を鹵獲したことに対する贖罪という意味もあったのかもしれない。
そして、これは、昭和天皇からの申し出であった。
昭和天皇（当時、皇太子）は、１９２１年３月から外遊で、第一次世界大戦の戦地となったところを案内され、ベルギーではルヴァンの惨状を見聞した。そして、自らルヴァン大学再建に協力したいと申し出る。
昭和天皇の意志を受け、ベルギー再興運動が国内で設置され、会長に就任したのは渋沢栄一である。
そして、ベルギーへ送る図書の選定に当たっては東京帝国大学図書館長の和田万吉が担当する事となる。
しかし、およそ三千冊の貴重書が東京帝国大学の図書館に集められたが、１９２３年９月１日、関東大震災によって図書館は壊滅的な被害を被ることになる。すなわち集めた本のみならず蔵書７０万冊が灰燼に帰してしまう。
ヨーロッパ各国からは東京帝国大学図書館再建のための支援が行われることになる。
興味深いのはベルギーも支援運動に参加していた点であろう。
この時、日本はベルギーに送る為の和書を集め、ベルギーは日本に送る為の洋書を集めていたのである。おそらく、明治時代から日本の皇室とベルギー王室には深い交流があり、その絆が、改めて証明されたのだと言えるであろう。
渋沢らはこうした支援に応える為、ルヴァンへの書籍の寄贈を継続すべく事業を力強く推進すべきだと主張した。
震災後、責任を取って東京帝国大学図書館長を辞した和田万吉は、比較的被害が少なかった東京美術学校を借りて、再びルヴァンに贈るための書物の収集を行い始める。
ここで、実際に作業の中心となって、和田の意中の本を集める役割を担ったのは、漆山又四郎という人物であった。
漆山は、幸田露伴に気に入られ、幸田家の助手となる。そして、露伴の弟で日本史学者の幸田成友とも友人になった漆山は、露伴が書く小説の資料を集めるために、図書館や古書店に通い詰めたことがあった。なかには、「漆山本」と呼ばれるほどの価値の高い本を見つけ出すことにも成功している。
さて、漆山が和田の手足となって古書を集めたのは、幸田露伴や幸田成友からの紹介が大きかったものと考えられる。
こうして、現存する世界最古の印刷物として知られる奈良時代の「百万塔陀羅尼」、室町末から江戸初期にかけて挿絵入りで書かれた「奈良絵本」、慶長以来の「伊勢暦」、その他、五山版や古活字本など三千点に及ぶ貴重書を集められた。
和田万吉が自ら「もう今後、あれだけあつめることはできまい」と漏らした程の、日本文化の粋を凝らした古代から近代まで貫くコレクションであった。
これらの書籍は日本郵船の会長でもあった渋沢栄一が送料を半額出すことにして六回に分けて慎重にベルギーへ搬送された。
そして、ベルギーからは、感謝の印として東京帝国大学に木製の巨大な地球儀が贈られた。ただ、この地球儀は無色である。
それは、当時、我が国が満洲や南太平洋の島々を植民地として統合して行っていたことへの無言の抗議であったのかもしれない。
ところで、当時のベルギーには、この書物を読める日本文学の研究者が存在していなかった。
従って誰一人として本を開く者は無く、日本政府が贈呈資料を集めた専用の「日本室」を作って欲しいと要請しても聞き入れられない状態であった。ルヴァン大学はコンクリート製の地下室を作り、日本からの荷を開封もせぬまま保管したのである。
こうしてこの寄贈書は、忘れられたままになってしまう。
１９４０年５月、第二次世界大戦中が始まると、ドイツは、再びベルギーを攻撃する。
そして、ルヴァン大学はまたしても激しい空爆を受けて焼け野原と化したのである。ただ、コンクリートで作られた地下室に置かれていた日本の書物は奇跡的に無事だった。
１９７２年、ベルギー内部でオランダ語を母国語とするフラマン人、フランス語を母国語とするワロン人の抗争が勃発した。
フラマン語圏にあったルヴァン大学は、最

終的にワロン人を追放してしまうが、その混乱の最中、日本の書籍も廃棄されることになる。
幸い、ワロン人の手で散逸する事無く持ちだされ、彼らが創設した新たな大学「ルヴァンカトリック大学」に納められた。
しかし、ここに訪れる日本人はまったくおらず、日本学などの学科も創設されることはなかった。
昭和天皇の善意から発した贈り物……日本の貴重な書籍のコレクションが見つかったのは、ヨーロッパにある日本の古書の総目録、『欧州所在日本古典籍総目録』を作ろうというプロジェクトである。
ケンブリッジ大学・ピーター・コーニッキ教授、林望（当時、東横女子短期大学助教授）が中心となり、筆者（当時ケンブリッジ大学共同研究員、東洋文庫研究員）がスウェーデン、ドイツ、フランス、イタリアに滞在してそれぞれの国の図書館に所蔵される日本書籍の目録を作成したが、ベルギールヴァン・ラ・ヌーヴ大学にも一年滞在して、その目録を作成した。
すでに、小山騰氏（現、ケンブリッジ大学図書館司書）、山崎誠氏（元、国文学研究資料館教授）などによっても、ルヴァンへの日本古典籍寄贈のことは研究されているが、改めて第一次世界大戦をめぐる書籍の移動や、書籍に携わった人々を描きながら、「書物」とは何なのかということを改めて問うことができたと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
① 山口謠司　〈編訳〉『中国歴史文献学史述要―宋代の文献収集と朝廷の蔵書目録』大東文化大学　漢学会誌 53 号　2014、pp.215-233
② 田中良明　「北斗星占小攷」（『東洋研究』第 188 号、2013、pp.1-32
③ 山口謠司　〈編訳〉『中国歴史文献学史述要―朱子の注釈と弁僞』大東文化大学　漢学会誌 52 号　2013、pp.109-130
④ 山口謠司　〈編訳〉『中国歴史文献学史述要―歴史文献学における五代の重要な成果』大東文化大学　漢学会誌 51 号　2012、pp.321-333
⑤ 山口謠司　〈編訳〉『中国歴史文献学史述要―唐代の三大注釈書』大東文化大学　漢学会誌 59 号　2011、pp.51-72
⑥ 山口謠司　字書の改訂（単）『旧鈔本の世界―漢籍受容のタイムカプセル』（アジア遊学 140）勉誠出版　2011、pp.50-59

〔学会発表〕（計１件）
① 田中良明「敦煌文書と『乙巳占』」（術数学国際ワークショップ 2013-7「術数学と宗教文化」、京都大学人文研共同研究班「術数学―中国の科学と占術」主催、2013 年 7 月 20 日）、京都大学人文科学研究所

〔図書〕（計７件）
① 山口謠司『編訳　中国歴史文献学史述要』游学社　2014、246
② 山口謠司『漢字はすごい』　講談社 2013、192
③ 山口謠司『大人の漢字教室』　PHP 研究所　2013、189
④ 山口謠司、星弘道共著『般若心経』徳間書店　2013、111
⑤ 山口謠司『漢詩へのパスポート』　徳間書店、2012、112
⑥ 山口謠司『日本語にとってカタカナとは何か』河出書房新社　2012、209
⑦ 山口謠司『てんてん』角川学芸出版　2012、211

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山口　謠司（YAMAGUCHI Yoji）
大東文化大学・文学部中国学科・准教授
研究者番号：00286915

(2)研究分担者
田中　良明（TANAKA Yoshiakira）
大東文化大学・東洋研究所・講師
研究者番号： 90709354

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：